

昆虫採集論

魚返真央

「昆虫黄金時代」

二〇一七年春、広げた朝刊に昆虫たちの姿があった。それらは「日本人が初めて網羅的にまとめた『日本千虫図解』」(一九〇四年)における蜻蛉の画や、「手塚治虫もとりにした『原色千種昆虫図譜』」(一九三三年)の蛾のカラー・プレート、「学習図鑑の走り『学習昆虫図鑑』」(一九五一年)の表紙に並ぶ甲虫の標本写真などであった。紙面の半分ほどをつかった「世界に誇る図鑑大国」という見出しのその特集記事は、「さかなクン」が担う一角を除いてほとんど昆虫の話題で占められている。「日本は、多種多様な図鑑があふれる「図鑑大国」です。

出版各社がしのぎを削る子ども向け学習図鑑の充実ぶりも、日本特有」とはじまるが、すぐ次の文で雲行きが怪しくなる。

「在野の研究者の多さや収集好きなどの国民性も指摘されますが、近年は図鑑作りを支える屋台骨が揺らいでいます」「揺らいで」いる話として、「虫好きの減少が目立つ」ことや「子ども向け学習ノートの表紙に使われた昆虫の写真に「気持ち悪い」との声が寄せられる時代」であることが挙げられている。そして記事を締め括るのは二〇一六年秋に『日本産ゴミムシダマシ大図鑑』を刊行した「むし社」藤田宏編集長の、「マイナーな虫だからこそ、仲間のいる今の中に出したかった」という淋しげな言葉である。日本独自の繁栄と、近年における衰退。

今、「虫好き」をめぐる話題はおおむねそのように語られるのが常である。

記事の中に「虫専門の月刊誌があるのは世界的にも珍しい」とあるが、現在発行されている昆虫専門誌（雑誌、学会誌、同好会機関誌など）の中で『中央誌』と呼ぶべき月刊誌は、『月刊むし』（むし社）と『昆虫と自然』（ニューサイエンス社）の二誌である。そのうち『昆虫と自然』では、二〇一六年一月発行の別冊において「昆虫好きを育てるために」²⁾と題した特集が組まれた。「昆虫好きを育てるために」、日本各地で行われた試みの事例集である。本企画の主導者の福田晴男は冒頭の「総論にかえて」の中で、「昆虫採集の意義」を理解する人が少なくなつて久しい現代に警鐘を鳴らし、「今なぜ昆虫好きを育てなくてはならないのか」の理由を主に二点挙げている。一つは「自然に入り込む窓口として最適な昆虫採集をなくすと、多様性のある自然の中から、問題を見出し、仮説を立て、科学的に解決する愉しさを理解する人間が消えてしまうと思うから」、もう一つは「自然の織りなす不思議な世界から瑞々しい感性を培う人間をも消してしまふ恐れがあるから」である。そして「この『昆虫と自然』の別冊記事が一般読者の目にも触れ、『昆虫採集』の大切さが再認識され、戦後間もない頃のように、街中の公園で昆虫採集する子どもを見かけたら、大いに励まし

てもらえるような時代を再来させたい」と述べている。ここで「育てなくてはならない」と言われている「昆虫好き」とは、「昆虫採集」を行う者のことである。

昆虫採集とは、一言でいえば昆虫（節足動物門昆虫綱に含まれる一群の動物。人類の出現より遙か昔の四億年前から地球上にいたと推定され、現在も全動物の中で最も種数が多い）を捕虫網等で捕獲し、展翅や展足等を施し乾燥させて標本にし、同定（名前を付け、分類体系の中に位置付けること）し収集することである。一八世紀後半に西欧貴族の間で興ったとされ³⁾、植物、貝殻、鳥などの採集と共に博物学（natural history）の繁栄を支えた。博物学とは、大雑把に言えば動植物や鉱物を発見し、その標本を保存すると共に綿密に観察し、自然の多様性と複雑性に喜びを見出し、命名し分類し収集し、historyの意である記述を行うというものである。一九世紀には殊にヴィクトリア朝において幅広い階級の人々の間で楽しみとして熱狂的に受け入れられたが⁴⁾、その博物学の特色は「文学対科学の二分法を一般的に認めようとせず、ふたつのいとなみの最良の特質を掬いとうとした」⁵⁾ことにあったという。

その昆虫採集が日本に伝来したのは江戸時代、鎖国下から訪れはじめた外国人研究家、主にイギリス人やドイツ人たちによってであった⁶⁾。日本人で初めて本格的に昆虫採集を行ったの

は田中芳男という信州飯田の人で、洋学や本草学を学んだのち博物学を修めて江戸へ下り、ナポレオン三世統治下フランスの要請を受けた幕府から「虫捕御用」を命じられた。慶応三（一八六七）年、第二回万国博覧会へ出品するため標本を携えてパリへ渡り、帰国後は各地の物産を集め、それが日本の博物館の萌芽となった。博物館という名称も田中が考案したものである。

日本における昆虫採集は当初、一部のエリート層を中心に行われていたが、明治時代初期に博物教育において昆虫採集を奨励する流れが始まり、そして昭和初頭から一〇年代半ばにかけての十数年間に、「昆虫に対し異常ともいえる関心の高まりが見られた時代」^②が到来する。「虫屋」^③と呼ばれるような人々が量産されたこの時代は、当時出版されていた東京蟲乃會の機関誌『蟲』に「それにしても昆虫の人氣の素晴らしさや、學者も文人も政治家も民衆も、こぞつて昆虫く、この所昆虫黄金時代」^④とあるように、「昆虫黄金時代」と呼ばれた。この「昆虫黄金時代」の内訳は、大野正男によると「昆虫学の研究態勢」が「急速に整い、また研究成果も着実に増大して行った」こともあるが、特筆すべきは昆虫への「関心の高まり」が社会現象となったことで、具体的には「大正一一年に始まるファール」の「昆虫記」、その刊行が昭和期に入って本格化したこと、「横山桐郎の処女作『蟲』（弥生書院）がベストセラーになった

こと、そしてその中に盛られた虫の世界のわかりやすさ・大衆性、その大衆性に一般人の関心がひきつけられたこと」、「生体写真が普及し始め、昆虫の世界が一般人にも親しみやすくなったこと」、「学校教育の中で昆虫採集が一般化し、その経験者の中に昆虫趣味がじわじわと浸透していったこと」が挙げられる^⑤。「昆虫黄金時代」の勢いは戦況の悪化に伴い一時失速するが、戦後初めての「学習指導要領（試案）」には「貝がら・石・虫・その他の小動物や植物などを採集すること、集めたものを順序よく分類整理すること、観察し、その記録をとること」^⑥と記されている。その後しばらく昆虫採集は学校教育において奨励されていた。

しかし昭和二三（一九五八）年、学習指導要領から昆虫採集を奨励する文言が消える^⑦。それでも昭和三〇年代後半ごろまでは夏休みの自由研究の代名詞であり続け、百貨店には標本を取り揃えた昆虫用品売場が見られたが、昭和四六（一九七一）年から昆虫は「採集」ではなく「観察」の対象と明記される。その背景には、高度経済成長期から安定成長期へ移行した当時公害や都市開発が在来の昆虫相に打撃を与え、それに伴う自然保護運動の高まりと共に広く浸透した「採集したら減ってしまう」という間違った考え方と「昆虫を採ったら可哀想という考え方」があると福田は指摘している。

昆虫採集の是非を巡っては長年に渡る論争があり、肯定側と否定側の主張によく見られるキーワードは上述の「昆虫好きを育てる」文章中にも現れている。それは肯定されるとき「科学」・「感性を培う」という言葉、また否定されるとき「減ってしまう」・「可哀想」という言葉である。現在、昆虫採集を擁護する大概の文章には狭義の「科学」、自然科学が持ち出される。「昆虫採集にかかわる一切の事項を総括し、整理して体系化」¹³し、「昆虫採集を学問として位置づけよう」とする大著『昆虫採集学』(Entomosyllogology、一九九一年)においても、論争の概要がまとめられた章の中で肯定側の主張の筆頭に「自然科学研究の資料となる」ことが挙げられている。自然科学の一分野である生物学は分類を基盤とし、学名を保証するものは標本であり、すなわち昆虫採集なくしてあらゆる昆虫学は成り立たない。そのことから自然科学が有益であるという前提のもと、昆虫採集の有益性が打ち出されようとする。「採集したら減ってしまう」であるとか、主として自然保護運動を推進する立場からなされる「採集は自然を損なう(自然破壊である)」という昆虫採集否定への反論としても、自然科学を拠り所とした主張は常套である。科学的・合理的な自然保護の理念である「環境保全」に基づき、「採集は自然を損なわない。種の消滅には到らない」、「個体の生命を守ることが即自然保護では決して

ない」、「動物愛護と自然保護とを混同している」などと言われる。もっとも「可哀想」という感情であるとか、道徳的・宗教的観点からの「(昆虫の)生命を奪うことは悪いことである」といった主張に対しては自然科学で相対するには限界があり、「採集者にそれが強制されるのはおかしい」などと言うに留まるほかないのだが、それでも目下のところ自然科学が最も有力な後ろ盾といえよう。しかし自然科学を盾にした昆虫採集肯定の主張は、一般に自然科学に寄与しないと思われるマニアやコレクターによる昆虫採集にしばしば足を引っ張られ、『昆虫採集学』においても「珍しい種類を採った時には興奮を押さえ難い」ことは認めつつも「狩りの楽しみ、或いは収集だけの楽しみで昆虫を採集する行為は昆虫採集学には含まれない」と定義することで擁護の対象から除外している。

多くの場合、昆虫採集を否定する側の主張も対する肯定側の主張も、自然科学による根拠と感情的なものとが同時に提示され、決着のつきようのない常套句の応酬でしかない。しかし昆虫採集が学校教育から追放されて久しく、採集禁止の取り締まりは強化の一途をたどり、各地の昆虫同好会で会員の高齢化が進み、昆虫専門誌の『中央誌』において上記のような特集が組まれることに鑑みれば、社会的には長らく昆虫採集肯定側が劣勢であると見てよいだろう。劣勢というよりも、昆虫採集を巡

議論自体が衰退しているようであるのは、近年メディアに取り上げられた話題が昆虫採集の是非ではなく、「子ども向け学習ノートの表紙」に「昆虫の写真」を載せるか否かであったことからうかがえる。

二〇一七年初夏、広げた朝刊に捕虫網を携えた少年たちの姿があった。それは「サザエさん」の四コマ漫画の中の「カツオ」であり、その「漫画が掲載された一九六四年、浅間高原で昆虫採集を楽しまれる皇太子（現天皇陛下）ご一家」¹³の写真である。「愛するがゆえに標本にする」という見出しのその記事は、「昆虫黄金時代」にも触れ、昆虫採集が「健全な趣味として敬意を払われていた」のだが、その「栄華」が「あっけなく陰り」「犯罪的な行為」に転落¹⁴したことを嘆いている。「昆虫採集は西洋伝来だが、あまねく大衆にまで広まったのは日本だけだ」とある。

かつて昆虫採集は学校教育において手放して奨励され、奨励の機運が培われた背後には「昆虫黄金時代」と呼ばれた社会的な後押しがあった。「昆虫黄金時代」はファーブル『昆虫記』や横山桐郎『蟲』や多数の図鑑や雑誌など出版文化に支えられ、今なお「図鑑大国」であるとか「虫専門の月刊誌があるのは世界的にも珍しい」と言われる中に、昆虫を巡る文化と出版文化との密接な繋がりを見て取れる。本稿は昭和初期の「昆虫黄金

時代」に出版された「蟲」の字のつく書物の中で殊にベストセラーとなった横山桐郎『蟲』と加藤正世「趣味の昆虫採集」、そして横山が立ち上げた「東京蟲乃會」の機関誌『蟲』と加藤の「昆虫趣味の會」の機関誌『昆虫界』を中心に、綴られた言葉に光を当てることによって、そもそも「西洋伝来」の昆虫採集がなぜ日本で「あまねく大衆にまで広まった」のか、その核心に迫ろうとする試みである。ひいてはその作業を踏まえて、現在「犯罪的な行為」に転落¹⁵したと言われる根本に何があるのか探ってみよう。

『蟲』・『蟲』

横山桐郎は大正一五（一九二六）年の処女作『蟲』や旗揚げした東京蟲乃會の機関誌『蟲』のほか、新聞各紙、総合雑誌、婦人雑誌、教育誌、科学誌などに寄稿し、また講演や放送にも出演し、それらの諸活動を総括して「昆虫黄金時代」の火付け役になったとされる人物である¹⁶。ベストセラーとなった単著のほうの『蟲』は、「自序」によれば「少年時代から今日まで、いろいろな蟲に就て私が観た事、感じた事、嬉しく思つた事、憤慨した事などの赤裸々の記録」¹⁷で、「蟲」の生態が時に「人間」の「社會に對する憤慨や批評」を織り交ぜつつ語られ、そ

の主観による語り口は当時としては目新しいものであった。

「此昆蟲観は、確に従来の傳統的記述法を破壊して、新らしい観察と批判とに立脚した現代的の昆蟲記だと自ら信じて疑はない」¹⁷⁾とあるが、「昆蟲記」という言葉は大正一一(一九二二)年にFabreの *Souvenirs Entomologiques* 第一巻(一八七九年)を初めて翻訳した無政府主義者大杉栄による訳語である¹⁸⁾。大杉は「譯者の序」において「フアブルの観察や實驗の仕方の實に手に入つたうまさ! 描寫の詳密さ! 文章の簡素雄渾さ!」¹⁹⁾などと絶賛し全十巻を訳すつもりでいたが、第一巻を刊行した翌年、憲兵隊に殺されてしまう²⁰⁾。しかし『昆蟲記』は、他の翻訳者たちに引き継がれて刊行され続けた。

大杉はフランスの「フアブル」評の中で「一番氣に入つた」ものとして、「哲學者のやうに考へ、美術家のやうに見、そして詩人のやうに感じ且つ書く」²¹⁾という言葉を紹介している。訳者が昆虫學者ではない大杉であり、その大杉も昆虫學の書として訳したわけではなく、その文章がしばしば主観的であると評されていたフアブルの『昆蟲記』は、当時主として農業害虫の同定や分類、その除去に追われていた戦前の昆虫學界には受け入れられる余裕がなかったと言われる²²⁾。それよりも真っ先に受け入れたのは、その文章が科学であるか否かなどに拘泥しない大衆であった。横山桐郎は農學博士だが彼の東京蟲乃會は、当

時昆虫學の第一人者で「蟲聖」と呼ばれた江崎悌三から「昆蟲を研究する同好者以外に、昆蟲についての文學、藝術、民俗などに興味をもつものを対象とした特殊な存在」²³⁾と評されるような稀有な会であつたからこそ、フアブルを受容し、讚美し、その感化を受けて生み出された『蟲』は大衆に受け入れられ、ベストセラーとなつたのである。そして横山の手がけたもう一つの『蟲』、大正一五(一九二六)年に旗揚げされた東京蟲乃會から昭和四(一九二九)年八月に創刊された機関誌『蟲』は、口絵の「アンリ・フアブル」の肖像で幕を開ける。「發刊の辭」において会長の横山はこの創刊号を「幼い時から梅檀の香りを備へてゐた」²⁴⁾「フアブル」に喩え、また「蟲と一生を共にしたフアブル」²⁵⁾という文章は「フアブル」を讀える言葉で溢れている。大杉の紹介した言葉を引いた上にさらに言葉をつくし、「哲學者のやうに考へ、美術家のやうに見、そして詩人のやうに感じ且つ書く」稀といふよりも、未だ曾て吾々人類が持つた事のない、又恐らく再び持ち得る機會はあるまい、と云つて差支へなからう程の、優れた詩人的昆蟲研究家であり且つ自然の觀察家」²⁶⁾などとする。

横山は「世の中の人々は蟲といふものに對して、一體どんな考へを持つてゐるのかよく判ら」²⁷⁾ず、「恐らく大多數の人は頭から蟲を輕蔑し、氣味惡がり、毛嫌ひしてゐるものと思つてゐ

た」が、「豫想を裏切」られ、「社會の各方面に對して意想外の反響を呼び起こしたのに、全く驚いて終つた」と述べている。

「昆蟲黄金時代」前夜まで、横山によればおそらく多くの人から「蟲けら」と一口に貶」られがちであつたものは、「フアブル」「昆蟲記」とそれを礼讃しベストセラーとなつた『蟲』の影響により、「觀察」の対象として社會に受容されていった。謂わば「蟲」を仔細に、美的に見る術が浸透したのであるが、その萌芽は昆虫学畑から生じたわけではなかつたのである。

『趣味の昆蟲採集』・『昆蟲界』・『少年昆蟲界』

昭和七（一九三二）年、横山桐郎が夭逝する。支柱を失つた東京蟲乃會は解散せざるを得なくなり会誌『蟲』も終焉を迎える。突如として空いた大きな穴を埋める後継者的役割を担つたのは、加藤正世であつた²⁸⁾。東京蟲乃會の存続を試みるも果たせなかつた加藤は、同年に急遽、新たな会を旗揚げし翌年に会誌を創刊する。「昆蟲趣味の會」と『昆蟲界』である。「昆蟲趣味の會」という名称は、加藤が昭和五（一九三〇）年に初めて出版した著書『趣味の昆蟲採集』の「読者の集まりの會」の意で命名された。

『趣味の昆蟲採集』は、「總べて著者の經驗を基礎とした」²⁹⁾と

いう「昆蟲採集」の指南書である。日本における昆虫採集指南書の出版は明治一六（一八八三）年の曲直瀬愛『採蟲指南』（眞の著者は「虫捕御用」の田中芳男であると伝えられている）にはじまり、その後、明治・大正を通じて数多く出版された。

しかし昆虫採集を「趣味」であるとしたのは『趣味の昆蟲採集』が初めてである。昭和二〇（一九四五）年に絶版となるまで一五年間に二六版まで版を重ね、売上実績で横山桐郎『蟲』を上回るベストセラーとなつた。「横山を黄金時代の火付け役とすれば、加藤はその推進者」³⁰⁾であつた。

『趣味の昆蟲採集』は「昆蟲と人生」の章で幕を開ける。「昔から何の蟲けらがとつまらないものの代表者の様に蔑まれて居る昆蟲も吾々とは中々深い關係が有るものだ」³¹⁾という文からはじまり、そこに「フアブル」という語が出てくる。それは「彼の有名なアンリー・フアブルの生涯は蟲界の神祕を探る事であつた、又ラフカディオ・ヘルンは昆蟲を愛好して是れを文とし、詩として讚美したのである」という文で、その直後に改行があり、「蟲界の神祕を探り、その美を鑑賞する唯一の道は採集である」とある。「アンリー・フアブル」は、「蟲界の神祕を探る」ことを介して「採集」という語と結ばれ、ここではあたかも「フアブル」の「生涯」が「蟲界の神祕を探る」「唯一の道」、「採集」に捧げられたかのように読める。そして

次のように続く。

昆蟲採集と云ふと如何にも堅苦しく、學者ばかりの領分のように聞えるが、吾々が幼い頃もち竿をかついで公園に蟬の音を追ひ、蜻蛉を糸に繋いで振り廻した時代の延長に過ぎないのだ。

曠野に蝶を追ひ、峻峰に蟬を索め、有ゆる勞苦を惜しまず奇蟲珍種を獲て自ら樂しみ、自ら學ぶ事の如何に健康の増進、精神の修養に貢獻する處の多いかは、決して著者の我田引水ではない。

諸君！採集の時期は來た、綠濃き野邊にネットを振つて神の藝術に接しようではないか⁽²⁾。

「趣味」という言葉は、「昆蟲採集」を「學者ばかりの領分」ではなく「幼い頃」の「延長に過ぎない」とし、学校を出て大人になったのちも続けていく受け皿となった。その「趣味」としての「昆蟲採集」が「貢獻」するのは、「健康の増進、精神の修養」である。現在、昆虫採集の有益性が述べられるとき、大概その根拠として持ち出される科学という言葉は見当たらない。

『趣味の昆蟲採集』の読者を対象とした「昆蟲趣味の會」の機

関誌『昆蟲界』もまた「學者ばかりの領分」で読者を限定せず、盛んな投稿を受けて号を重ね⁽³⁾中央誌へと成長していく。

「蟲聖」江崎悌三は『昆蟲界』について、「全国の甚だ多数の同好者の支持を受け、ことに中学校生徒の同好者の発表機関として大きな役割を果し、この時代において年少同好者を encounter⁽⁴⁾した功績は甚だ大きい⁽⁵⁾と述べている。やがて昭和九（一九三四）年、「大きな樹」に成長した「昆蟲趣味の會」の「根元に出た芽」として「少年昆蟲趣味の會」が生まれ、会誌『少年昆蟲界』が創刊される⁽⁶⁾。「趣味」という言葉は学校教育を受けている最中の「少年」に対しても、さらに「昆蟲採集」を後押しする言葉となった。その「發會の辭」には、「昆蟲の趣味」の「齎す」「利益」が五つ挙げられている。

- 一 昆蟲採集は崇高なスポーツであります。
- 二 昆蟲採集は身體を強健にします。
- 三 觀察眼を養ひます。
- 四 常に美しい標本に眼を觸れる爲美的精神を養ふことになります。
- 五 標本の整理等に依り、整頓、秩序等の習慣を養ふ上に大なる効果があります⁽⁷⁾。

「趣味」としての「昆蟲採集」は「觀察眼を養ひ」、その有益性は「崇高」や「美的」という言葉に支えられている。ここにも科学という言葉はない。そして加藤正世は、自らの幼少期を回顧しつつ次のように述べている。

その時代には大人の間でさへ昆蟲の理解のある人は殆ど無かつた様な時ですから、まして子供の私等は、捕蟲網を持つて町を歩くのさへ隠れる様にして居たものでした。大抵らで網をかついで歩くと、蟲狂だなんて友達にからかはれたものです。

處が最近ではどうでせうか。全國の中學校其の他の諸學校には昆蟲研究會の組織せられて居る處が甚だ多く、夏日郊外へ行けばネットを振り廻して蝶を追ふ可憐な少年達の姿を見ないことはありません³⁶。

「大人の間」で「昆蟲採集」の「趣味」が普及するときにはすでに、「昆蟲採集」は「幼い頃」の「延長に過ぎない」と、「幼い頃」が持ち出されていた。「幼い頃」に「もち竿をかついで公園に蟬の音を追ひ、蜻蛉を絲に繫いで振り廻す、それは本能に根ざす純粹な行爲と言えるかもしれない。だがその無邪気な営みから「昆蟲採集」と呼ばれる営為に至るまでの「延長」

の間には、指南書が必要なほどの工程の複雑化があり、「健康の増進、精神の修養」「神の藝術に接しようではないか」といった大義名分や「幼い頃」への郷愁が纏わりついてくる。それらが纏わりついたまなざしで「捕蟲網を持つて町を歩く」「子供」を眺めるとき、「蟲狂」ではなく「可憐な少年達」が現われ出るのである。

しかし、「可憐な少年達」という言い回しの要因は、おそらくそれだけではない。「昆蟲の趣味」の「齎す」「利益」の中に科学という言葉は見当たらないが、「生物學」という語はべつの箇所に見られる。「これはひとへに生物學者であらせられる聖上陛下の御聖徳が然らしむる處であります。此の輝かしき昭和の御代に心おきなく昆蟲に親しみ得る吾々は、誠に幸福と謂はねばなりません³⁷」という文の中である。「生物學者」は「聖上陛下」であり、「生物學」は「御聖徳」と一体となって「昆蟲採集」の後ろ盾となっている。それゆえ「生まれ乍らにして昆蟲に興味を持つて居る」「日本人」や、「日本人の特性」である「斯うした奥床しい趣味」によって「培はれる」「世界無比の大和魂」という言葉が其処此処に現れ、「可憐な少年達」という言葉もその系列に属しているように見える。

毎年「百花繚乱、千蟲乱舞の春」³⁸は来て、「毒蟻は掃除され、捕蟲網の塵は掃はれて新たなスタートを切る。今春始めて網に

する紋白蝶にも限りなき愛着と懐しさを覚える」³⁹。昆虫を捕らえ、標本にし、同定し収集し、各地の会員から報文が寄せられ、『昆蟲界』最新号が発行される。やっていることは基本的に変わらないのであるが、やがて「群る蜻蛉を見る時 心は遙か支那、上海に活躍する我が空軍の上に飛ぶ」⁴⁰ようになる。

「趣味」は、「此の崇高な趣味をどこまでも捨てず養って行くことは我々の義務であることを痛切に感ずるものである」⁴¹というように、「義務」の様相を帯び、会員は「昆蟲學徒」となり、「趣味」を通して「學術に貢獻以て報國の實を挙げ」⁴²ることや、「精神と肉體の原動力と爲し、健全なる身體を造」⁴³ることが求められる。たしかに「國力の南進に伴つて」⁴⁴感染症を媒介する昆虫の脅威にさらされ「昆蟲學が益々重要になつて」⁴⁵くるのだが、多くの「昆蟲學徒」にとって「趣味が御役に立つ」⁴⁶とは、真っ先に「健全なる身體」に他ならない。事実、「會員中よりも聖戰に参加された諸君が少くない」⁴⁷のであり、「日頃の手並みを發揮して米英の蟲けら共をひねり潰して呉れることと大いに期待してゐる次第である」⁴⁸という、「昆蟲採集」においてあるまじき「ひねり潰」などという言葉まで見られるようになる。このような言い回しは検閲が厳しさを増し、物資も不足する中で雑誌が生き延びるための方策であっただろうが、昭和一八（一九四三）年の年の瀬ついに「用紙の配給が非常に

窮屈にな」⁴⁹り、「戰時中休刊」⁵⁰に追いやられる。だがそのときまで存続できたその要因には、「生物學者」である「聖上陛下」の「御聖德」と、「健全なる身體を造」ることに加えて、「日頃の手並み」が「聖戰」にとって有益とみなされたことがあるのではないだろうか。

『趣味の昆蟲採集』によれば採集の第一歩は、「蟲」が捕虫網に「入つたならば必ず一回網を廻轉して地上に置き、靜かに毒管に収め」、「それが蝶の場合には胸部の側面を強く拇指と食指とで壓し殺してから取り出し」、また「毒瓶」に入れたら「すぐに取り出すと間もなく生き還るから充分に死ぬのを待つてから取り出す」⁵¹。「殺」すのである。そうして「死」んだ昆虫は、展翅や展足を施されることによって死骸ではなく「標本」⁵²と呼ばれる。「美しい標本」となる。

東京蟲乃會の機関誌『蟲』の中で鑑とされ、きらびやかに装飾されていたのは「ファブル」という文字であった。その光に照らされるようにして、かつて「蟲けら」と呼ばれていたものは「觀察」の対象としての「蟲」になり、「趣味の昆蟲採集」では「趣味」の「採集」の対象としての「蟲」になり、「神の藝術」とも称された。そして、そこから派生した「少年昆蟲界」の創刊号においてきらびやかに装飾されているのは、「聖上陛下」の文字である。このような経緯を辿ると、「特攻隊員

が、荷物の中にたった一冊詰めることを許された本の中には『万葉集』と共に『昆虫記』の文庫版があった³³⁾という逸話も突飛ではない。

「昆虫關係書とエログロ出版」

東京蟲乃會の機関誌『蟲』の中に、「不景氣と失業苦との眞只中に、獨り景氣のいゝのは昆虫關係書とエログロ出版の實行、この所文筆生活者も出版社も昆虫様々。昆虫黄金時代の一九三〇年も將に永遠に逝かんとしてゐる、さて一九三一年はどうなる事か³⁴⁾」という文がある。「昆虫黄金時代」眞只中の出版界を「昆虫關係書」と共に盛り上げていたのは「エログロ出版」であった。「エログロ」はその前段階として「変態」という語が、一九一三（大正二）年にクラフト＝エビングの著書『*chopathia Sexualis*（一八八六年）の翻訳『変態性慾心理』』により學術用語として「性慾」と結び付けられ、しだいに變態性慾の意に收斂して流行語となり、世俗の性的なものへの関心が煽られる中で³⁵⁾、昭和初頭に盛況を極めた。その内訳としてカフェや浅草の舞台などの「エロティックな刺激」と、紙面を賑わす獵奇的事件の紹介記事などの「グロテスクな刺激」が挙げられ³⁶⁾、出版界においては殊に「エログロの帝王」³⁷⁾こと梅原

北明が、「エログロ」出版に着手し、出版しては官憲に弾圧され発禁されることを繰り返した³⁸⁾。江戸川乱歩の作品群はしばしば「エログロ」を象徴する存在と位置付けられるが³⁹⁾、とりわけ昭和十四（一九三九）年に公然絶版となった『芋虫』、一部削除が命じられた『獵奇の果』『蜘蛛男』、「検閲方針に従って、自作を見渡してみると、嚴密に云えば一作として無難なものはない⁴⁰⁾」く、「さし当り最も反時局的と考え⁴¹⁾」たため乱歩自らの手で絶版に付された『陰獸』『盲獸』『赤い部屋』『人間椅子』そして『蟲』はその代表格といえる。

昭和十四（一九二九）年、『改造』に発表された『蟲』という作品の「蟲」の字は、原則的に新字体で統一された現在の全集においても「正字体の視覚的效果が計算されたと思われる⁴²⁾」という理由で概ね正字体のまま残されているが、その字が表すものは乱歩いわく「人間の死体を蝕む極微生物（蛆ではない）⁴³⁾」である。物語は柾木愛造という男が「サロメ」⁴⁴⁾を演じる舞台女優を「殺害」し、「死骸」の「人外境の魅力」に「惹きつけ」られて「死體防腐」を試みるというもので、柾木は「異端の書物」を「買い集め」て、「虫の食つた青表紙や、十八世紀の洋紙や皮表紙の匂ひをかき、それらの釀し出す幻怪な大氣の中で、益々嵩じて來た病的な空想に耽る」そして「書物」で得た知識をもとに「死體防腐」に取りかかるのだが、肝心の

〔……〕 フォルマリンの溶液を作り、注射の用意をととのへた。

「世に類もあらぬ厭人病者」である柁木の「素質」は「既に已に、彼の幼年時代に發見することが出来」⁽⁸⁶⁾、また「サロメ」の女優が「幼年時代には彼の神様」⁽⁸⁷⁾であったなど、事件の発端が「幼年時代」にあることがたびたび語られる。乱歩は隨筆の中で、「グロテスクは、人類にとっては太古のトーテム芸術への郷愁であり、個人にとっては幼年時代の鬼や獅子頭への甘き郷愁ではないであろうか」⁽⁸⁸⁾と述べており、それによれば

端となる「幼年時代」への「郷愁」は、『昆蟲採集』における「神の藝術」やその「美しい標本」、無邪気な「幼き日」への郷愁とそれぞれ対をなす。そして戯曲『サロメ』が書かれたヴィクトリア朝時代は、博物学全盛の時代でもあった。

動物の屍體に集まる甲蟲——埋葬蟲。闇魔蟲・步行蟲・食肉生の金龜蟲・隱翅蟲等は腐敗しかけた屍體で獲ることが出来る。吾々には鼻持ちならぬ臭氣も彼等には蒲焼にも等し

いのだ。採集の途次こんな屍體を發見したならば勇を鼓して引くり返して見るべきで、幾多の奇蟲がうごめいて居るのを發見する事が出来る。筆者の標本箱を飾る多數の珍蟲は斯うして獲たものが非常に多い⁷⁰⁾。

〔……〕トノサマバツタ位の大きなものは腹部の兩側にある凹んだ線——背面と腹面との接合線——を解剖鋏で切開してピンセットで内臓を除去し、脱脂綿の少々をピンセットで挟んでフォルマリン液に浸して腹部の内面から胸部の方まで掻き廻して置く。これで完全に防腐と色止めとが出来る⁷¹⁾。

標本にする幼蟲は製作の直前に毒蟻で殺し、それを紙上に載せて靜かに體を揉んで軟くなつたならばピンセットで肛門を破り、その上に反古紙を掩うて徐々に内臓を採み出し、充分空にしてから硝子管を挿し込み、押へ金で肛門の附近を押へて空氣を送り乍ら乾燥さすのである⁷²⁾。

「昆蟲黄金時代」において、「趣味」としての「昆蟲採集」は、広く浸透する過程で時局的な有益性にも支えられ、きらびやかな後ろ盾を得て、纏わりついたその光が眩しさを増していく中いささか無批判に社会的地位を得たが、同時期には「エログ

ロ」ブームとそれに対する厳しい弾圧があった。しかし健全とされたものと、不健全とされたものが同時に花開いていたのは、そもそも分かちがたいものだからであり、奨励と弾圧という真逆の反応によって、あたかも真逆のものであるかのように見せられていたのである。それらが分かちがたいことを秘匿しなければ、殺しの大義名分である「聖戰」に、「エログロ」が含まれていることが露わになってしまいうだろう。乱歩は次のように述べている。

神は残虐である。人間の生存そのものが残虐である。そして又本来の人類がいかに残虐を愛したか。神や王侯の祝祭には、いつも虐殺と犠牲とがつきものであった。社会生活の便宜主義が宗教の力添えによって、残虐への嫌惡と羞恥を生み出してから何千年、残虐はもうゆるぎのないタブーとなっているけれど、戦争と芸術だけが、それぞれ全く違ったやり方で、あからさまに残虐への郷愁を満たすのである⁷³⁾。

「昆蟲學者と文學者の座談會」

戦後、国字政策により「蟲」は「虫」となったが、昆虫採集は初めての学習指導要領に取り入れられ、奨励の流れはしばら

く続いた。この時代を「後期黄金時代」と呼び、遡って昭和初頭の「昆虫黄金時代」を「前期黄金時代」と見なすこともある⁷⁶⁾。しかし昭和三三(一九五八)年、学習指導要領から昆虫採集を奨励する文言が消え、昭和四六(一九七一)年に昆虫は「採集」ではなく「観察」の対象とされる。昆虫採集の「栄華」が「あっけなく陰り」「犯罪的な行為」に転落するまでの流れは、自然保護運動との関わりや一部のマニアやコレクターによる乱獲問題などさらなる書物をひもとく詳細に見ていく必要がある。だが検討するまでもなく、「減ってしまふ」・「可哀想」・「生命を奪うことは悪い」といった昆虫採集批判の矛先に「標本」が死骸であり、捕らえた昆虫が「標本」になる間に「殺し」が含まれているそのことが、常にあるのは明らかである。学校教育において昆虫「採集」が排除され、「観察」となった理由の根源もそこにある。しかし今、「虫好きの減少が目立つ」とか「子ども向け学習ノートの表紙に使われた昆虫の写真に「気持ち悪い」との声が寄せられる時代」と言われることに鑑みれば、排除の理由はもはや「殺し」だからという分かりやすい批判対象ではなく、「観察」する昆虫そのものに「エログロ」の要素があるからということになる。あるいは昆虫が「観察」の対象となる以前のように、「頭から蟲を輕蔑し、氣味惡がり、毛嫌ひしてゐる」のかもしれない。

しかし昆虫採集が理科から追放されてもお、毎年多くの中学一年生が、学校教育において昆虫採集と出会っている。ヘルマン・ヘッセの『少年の日の思い出』(高橋健二訳)が、昭和二二(一九四七)年に採用されて以来、国語の教科書に掲載され続けているからである。このような息の長い教材はほかに例がなく、「国語教材の古典」、「疑いなくわが国で最も多くの人びとに読まれた海外文学作品」と言われている⁷⁷⁾。それは「少年のころ熱情的な収集家だった」⁷⁸⁾男の打明け話である。「ぼく」は昆虫採集の「とりこになり」、「微妙な喜びと、激しい欲望との入りまじった気持ち」を知る。だがあるとき「この宝を手にいれたいという逆らいがたい欲望を感じて」他の少年の部屋に忍び込み、展翅板の上の「ヤマユガ」の針を抜き取る。咄嗟にポケットに入れたために「つぶして」しまい、正直に話したものの「けいべつ」され、悟った教訓は「一度起きたことは、もう償いのできないものだということ」である。話は、「そしてチョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなごなにおしつぶしてしまつた」という、標本を破壊し昆虫採集と決別する一文で締めくくられる。しかし「チョウチョを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそられるものはない」のである。

かつての中学生は、理科において昆虫採集を経験し、国語でこの話を読んだ。しかし理科では淘汰され国語では生き延びて

いるため、今やおそらく大半が昆虫採集の経験のない少年少女が、昆虫採集に明け暮れた日々の物語を読んでいる。そのことが特に違和感をもたらすことなく受け入れられているからこそ『少年の日の思い出』は教科書に留まり続けているのだろうか、学校教育における理科と国語の、その見過ごされている連携不全の中に、もっと大きな隔たりが潜んでいるように思えてならない。かつて『昆虫界』の創刊号と第二号にまたがる大特集は「昆虫學者と文學者の座談會」であった。

加藤（……）最近昆虫趣味の普及して來たことを考へて見ますのに、フアブルの昆虫記とか又さう云ふやうな讀物が非常に少年達の頭を刺戟し、或は一般の人の昆虫に対する理解を向上せましたことは明らかであります、それには文學者方の努力が非常に興つて力あることゝ信ずるものでございます。（……）昆虫學者の方と文學者の方との御協力に依りまして、完全な使命を果たして行きたいと思ひます⁽⁷⁸⁾。

「座談會」の冒頭に「昆虫趣味の普及には科學者だけの力では完全でない。文學者と連携してこそ眞價を發揮することが出来る」⁽⁷⁹⁾とあるように、「昆虫趣味の普及」には、「科學者」と「文學者」の「連携」が不可欠であるとされていた。「科學者」

が「文學者」に何を求めて「連携」を望んだのかと言えば、「自然界の本當のこと、昆虫にしても、あなた方の力に依つてそれを言ひ現はして戴いてさうして一般に普及さして行つたならば非常に宜くはないかと思ふのです」⁽⁸⁰⁾というように、「言ひ現は」すことによって「大衆」⁽⁸¹⁾に働きかける「力」であるらしい。「美文的に言ひ表はす」⁽⁸²⁾であるとか、あるいは「その人の善さ」⁽⁸³⁾を抜きにしては語れないような「フアブルの記述」であるとか、「文」や「記述」の「力」である。大杉栄をして、「詩人のやうに感じ且つ書く」、「描寫の詳密さ！文章の簡素雄渾さ！」と言わしめ、「讀み始めると、とても面白くて、（……）とうく他の本はあと廻しにして、（……）讀み耽」⁽⁸⁴⁾させた「力」である。

「座談會」の話題は「昆虫」に終始することなく、「科學者」の「客觀的」態度によって追究されるとみなされていた「科學」と、「文學者」の「主觀的」態度によって追究されるとみなされていた「文學」、それぞれの役割を巡って展開されている。「物を正確に見る」ことは「科學者の根本」だが⁽⁸⁵⁾、果たして「主觀の働きと云ふものがちつとも加はらぬ絶對的の客觀的態度と云ふものは、人間として持ち得るのかどうか」⁽⁸⁶⁾。「人間の當然の慾求として物を確かに見たい」⁽⁸⁷⁾のは「文學者」も同じである。出席者のひとり中西悟堂が後日「座談會」に関し

て綴った「文學と科學に就いて」⁽⁸⁾が併せて掲載されており、その中には、「文學と科學」、「元來この二つは根源的には互ひに相融合すべきものだ」とある。さもなくば「宇宙の生命力とは、本能の秘密とは抑々何であらうか」といった問いに立ち向かえはしないだろう。そして「二つ」は「一人の人」が「兼ねたいと望む限りは」、「同一人によつて同時に採用され、或ひは融通即一のものとして採用されることは、必ずしも不思議なことではなく又不可能なことでもない」。さすればその「人」の中で、もはや「二つ」ではなく、ここで目指されているのは、「文學對科學の二分法を一般的に認めよう」としない、博物學(natural history)であろう。

一九世紀のヴィクトリア朝において、博物學は幅広い階級の人々の間で楽しみとして浸透した。そして博物學の繁栄を支えた昆虫採集が日本で「あまねく大衆にまで広まった」「昆蟲黃金時代」においても、「幼年時代」に通ずるような、「楽しみ」であることが昆虫採集の第一義であった。そして「觀察」が克明であれば自ずから、昆虫の「エログロ」の要素が現れ出る。

しかし今では「珍しい種類を採った時」の「押さえ難い」「興奮」であるとか、「狩りの楽しみ、或いは収集だけの楽しみ」というのは『昆虫採集學』では除外され、あたかも純粹な「客觀」というものがあるかのように科學的有益性ばかり強調される。昆虫採集は「犯罪的な行為」に転落したと言われ、「氣持悪い」昆虫の写真も目の届かぬところへ排除されようとする。

「座談會」の面々が廻り再び集ったならばきっと、この「昆蟲趣味」衰退の根源に「科學」と「文學」の「連携」不全を見いだすことだろう。しかし当時の「科學」と「文學」の意味と、現在、科學と文學という語が一般に意味するところは、大きく異なっている。學術は細分化され、「二分法」は機能せず、もはや「連携」しようにも「あなた方」と呼べる者が誰なのかも「我々」と呼べる者が誰なのかすらもわからない。

今、昆虫採集が消えて無くなろうと、多くの人は困りはしないと思っているだろう。だがそれは學術の問題に繋がっている。

- (1) 「世界に誇る図鑑大国」、『朝日新聞』二〇一七年四月一六日、二六面。以下、この段落における引用は同記事より。
- (2) 福田晴男「今なぜ昆虫好きを育てなくてはならないのか」総論にかえて、『別冊 昆虫と自然』ニューサイエンス社、二〇一六年、二一四頁。以下、この段落における引用は同書より。
- (3) 奥本大三郎・岡田朝雄『楽しい昆虫採集』草思社、一九九一年、二六頁。
- (4) リン・L・メルル『博物学のロマンス』大橋洋一／照屋由佳／原田祐貨訳、国文社、二〇〇四年、二六頁。
- (5) 同前、一六三頁。
- (6) 江崎悌三「日本の現代昆虫学略史——日本昆虫学会四十年の回顧——」、『昆虫』第二五巻四号、日本昆虫学会、一九五七年九月、一五四—一五五頁。以下、この段落は同書参照。
- (7) 大野正男「加藤正世と日本の昆虫学」、『蟬類博物館——昆虫黄金期を築いた天才・加藤正世博士の世界』練馬区立石神井公園ふるさと文化館、二〇一五年、八九頁。
- (8) 「大人になってでも虫採りがやめられない人たちを、プロ・アマ含めて「虫屋」とよぶ。」青木淳一『博物学の時間 大自然に学ぶサイエンス』東京大学出版会、二〇一三年、七一頁。
- (9) 『蟲』第二巻三号、東京蟲乃會、一九三〇年、九一頁。
- (10) 大野、前掲書、八九頁。
- (11) 福田、前掲書、二頁。
- (12) 同前。この段落は同書参照。
- (13) 馬場金太郎／平嶋義宏編『昆虫採集学』九州大学出版会、一九九一年、i、一七八—一八〇、二二三頁。以下、この段落における引用は同書より。
- (14) 「サザエさんをさがして 愛するがゆえに標本にする」、『朝日新聞』二〇一七年六月一七日、三面。以下、この段落における引用は同記事より。
- (15) 大野、前掲書、八九頁。
- (16) 横山桐郎『蟲』彌生書院、一九二六年、一頁。
- (17) 同前、二頁。
- (18) 奥本大三郎『博物学の巨人 アンリ・ファブール』集英社、一九九九年、一五七頁。
- (19) アンリ・ファブール『昆虫記（一）』大杉榮訳、叢文閣、一九二二年、五頁。
- (20) 奥本、前掲書、三〇頁。
- (21) ファブール、大杉榮訳、前掲書、九頁。
- (22) 奥本、前掲書、四六頁。
- (23) 江崎、前掲書、一九四頁。
- (24) 横山桐郎『發刊の辭』、『蟲』創刊号、東京蟲乃會、一九二九年、一頁。
- (25) 横山桐郎「蟲と一生を共にしたファブール（一）」、『蟲』創刊号、東京蟲乃會、一九二九年、四頁。
- (26) 同前。
- (27) 横山、前掲『蟲』、一一二頁。以下、この段落における引用は同書より。
- (28) 大野、前掲書、八九、九三頁。以下、この段落は同書参照。
- (29) 加藤正世『趣味の昆虫採集』三省堂、一九三〇年、三頁。
- (30) 大野、前掲書、八九—九〇頁。

- (31) 加藤、前掲書、一一二頁。以下、この段落における引用は同書より。
- (32) 同前、二―三頁。
- (33) 江崎、前掲書、一九四頁。
- (34) 加藤正世「少年昆蟲趣味の會發會の辭」、『少年昆蟲界』第一巻一号、少年昆蟲趣味の會、一九三四年、二頁。
- (35) 同前、三頁。
- (36) 同前。
- (37) 同前、二―三頁。以下、この段落における引用は同書より。
- (38) 『昆蟲界』第八巻七三三号、昆蟲趣味の會、一九四〇年三月、七七頁。
- (39) 『昆蟲界』第七巻六三三号、昆蟲趣味の會、一九三九年五月、一七頁。
- (40) 『昆蟲界』第五巻四二二号、昆蟲趣味の會、一九三七年九月、八〇頁。
- (41) 『昆蟲界』第五巻四三三三号、昆蟲趣味の會、一九三七年一〇月、七七頁。
- (42) 前掲『昆蟲界』第五巻四二二号、八〇頁。
- (43) 同前。
- (44) 『昆蟲界』第九巻九四四号、昆蟲趣味の會、一九四一年一二月、六六頁。
- (45) 同前。
- (46) 『昆蟲界』第一巻二〇七号、昆蟲趣味の會、一九四三年一月、四三頁。
- (47) 『昆蟲界』第六巻五七七号、昆蟲趣味の會、一九三八年一月、九頁。
- (48) 『昆蟲界』第一巻一一六号、昆蟲趣味の會、一九四三年一〇

- 月、三四頁。
- (49) 『昆蟲界』第一巻二二四号、昆蟲趣味の會、一九四三年八月、七六頁。
- (50) 『昆蟲界』第一巻一一七・一二八合併号、昆蟲趣味の會、一九四三年一二月、二五頁。
- (51) 加藤、前掲『趣味の昆蟲採集』、二九―三〇頁。
- (52) 同前、五九頁。
- (53) 奥本、前掲書、二四頁。
- (54) 『蟲』第二巻四号、東京蟲乃會、一九三〇年、六二頁。
- (55) 菅野聡美『〈変態〉の時代』講談社、二〇〇五年、五五―五六、六四、一三八頁。
- (56) 竹内瑞穂『変態』という文化―近代日本の〈小さな革命〉ひつじ書房、二〇一四年、二〇四頁。
- (57) 同前、一七頁。
- (58) 『乱歩の時代―昭和エロ・グロ・ナンセンス(別冊太陽)』平凡社、一九九五年、一三一―一三二頁。
- (59) 同前、四一六頁。
- (60) 江戸川乱歩『わが夢と真実』、『江戸川乱歩全集』第三〇巻、光文社、二〇〇五年、二〇六頁。
- (61) 同前。
- (62) 『解題』、『押絵と旅する男』、『江戸川乱歩全集』第五巻、光文社、二〇〇五年、六〇二頁。
- (63) 江戸川乱歩『自作解説』同前、一一八頁。
- (64) 江戸川乱歩『蟲』、『改造』第一巻六号、改造社、一九二九年、一一〇頁。以下同書一〇四、一一二頁と、『改造』第一巻七号、改造社、一九二九年からの引用、一三四、一三七、一四〇頁。

- (65) 同前、第一卷七号、一四二頁。
 (66) 同前、第一卷六号、一〇三頁。
 (67) 同前、第一卷七号、一三五頁。
 (68) 江戸川乱歩「郷愁としてのグロテスク」、『讀賣新聞』一九三五年八月一八日。
 (69) 江戸川乱歩「妖虫」、『文学時代』一九三二年二月号。
 (70) メリル、前掲書、一九頁。
 (71) 加藤、前掲『趣味の昆蟲採集』、一四八頁。
 (72) 同前、一二四頁。
 (73) 同前、八〇頁。
 (74) 江戸川乱歩「残虐への郷愁」、『新青年』一九三六年九月号。
 (75) 前掲「サザエさんをさがして 愛するがゆえに標本にする」、『朝日新聞』、三面。
 (76) ヘルマン・ヘッセ『少年の日の思い出』岡田朝雄訳、草思社、二〇一六年、一九七頁。
 (77) ヘルマン・ヘッセ『少年の日の思い出』、『車輪の下』高橋健二訳、『ヘッセ全集』新潮社、一九八二年、一六二頁。以下同

- 書からの引用、一六三、一六五—一六七頁。
 (78) 「昆蟲學者と文學者の座談會」、『昆蟲界』創刊号、昆蟲趣味の會、一九三三年二月、五五—五六頁。出席者は奥村定一、加藤正世、中西悟堂、中村星湖、桑名伊之吉、木下周太、水谷まさる、四條輝雄。
 (79) 同前、五五頁。
 (80) 「科學者と文學者の座談會（承前）」、『昆蟲界』第二号、昆蟲趣味の會、一九三三年四月、一七七頁。
 (81) 同前、一七八頁。
 (82) 前掲「昆蟲學者と文學者の座談會」、六〇頁。
 (83) 同前、六七頁。
 (84) ファブル、大杉築訳、前掲書、五頁。
 (85) 前掲「科學者と文學者の座談會（承前）」、一七六頁。
 (86) 前掲「昆蟲學者と文學者の座談會」、六四頁。
 (87) 前掲「科學者と文學者の座談會（承前）」、一七五頁。
 (88) 中西悟堂「文學と科學に就いて」、『昆蟲界』創刊号、七〇頁。以下同書からの引用、六九—七二頁。

（おがえり まお／博士後期課程）